大正二年の横浜市生麦安養寺（同寺蔵）

宮本契善上人のこと

宮本契善上人

二大恩人

すでに述べたように、戒浄上人は、幼時に得た信仰を一度は全く失い、永年苦心の末に復活することを得られたのであるが（第二、三章参照）、その間、幾度か還俗を思いたたれたこともあった、という。その上人を鞭撻し、摂取不捨の光明を身に体して指導されたのは、宮本契善上人であった。また、如来様の三身四智を具足して、念仏の一道こそは、成仏の最勝道であるとの自覚を与えて下さったのは、仏陀禅那弁栄上人であった。両師のことを、上人は、「生涯忘れ得ざる二大恩人」[1]と、言っておられるが、上人の生涯を考える場合に、決して看過で

（1）「私の信仰が復活するまで」・全集中巻一九頁。

きない大切な恩人である、と思う。

平凡で非凡であった契善上人

上人は、契善師を兄弟子と呼んでおられる。契善師は、横浜慶運寺住職笹本良侃師のお弟子であったので、上人が同寺に入寺された関係で、兄弟子となられたわけである。上人は、契善師のことを、

兄弟子は無学文盲、肉食妻帯の平凡な人であります。酒も少々は飲みます。風采もあがらず、持戒堅固という方でもありません。夜更かしして食物を摂ることもあるというふうで、良い人ではありましたが一平凡僧でありました。(2)

と、述懐しておられる。無学文盲であったという点、兄弟子でありながら、上人とはいかにも対照的である。事実、契善師は、平凡な一僧侶にすぎなかった。また、若い頃は道楽者であった、という話もあるくらいであるが、この方が如来様のお力によって非常に尊いさとりを得させていただかれた、という。上人は、

……私の兄弟子は、ただ南無阿弥陀仏〳〵とオヤ様に甘えているうちに、

(2)「礼拝儀講話」・全集上巻九四頁。

お光明に育てられ慈悲のお顔を拝み、ついに仏眼までもお育てを受けました。実に無学文盲の者でありました。けれども、それが一面より言えば、かえって幸いであったともいうべきでありましょうか。なぜならば知識があると、かえってつまらない疑いをおこすからであります。[3]

と、述べておられる。また、令息の浄光師が、かつて上人に「契善師は、あまり猛烈な修行もしないのに、どうしてそんな尊い境地になったのだろう。道楽もしたというくらいなのに……」と尋ねると、上人は「そこが如来様のありがたいところだ。道楽をしたものは救わない、とおっしゃったことはない。ただ念仏するものは救うとおっしゃっている。このことをみると、素直に如来様をお慕い申せるということは、大切であり幸福なことだ」と、お答えになっている。[4]

如来様を見奉る

上人は、契善師の宗教的体験を、次のように述べておられる。

兄弟子は明治維新の前、英国人を殺したことで有名な生麦の安養寺という寺の住職でありまして、以前は私の今の寺にいたこともあります。明治

安養寺石碑

(3)「自然教・超自然教と円具教」四・観照二七号。

(4)橋本徳岡氏の御教示による。

十六年に大病をして数日間人事不省に陥りました。良い手当でよくなりましたが、げっそり痩せてしまいましたので、ぜひともお浄土へ参らせて頂きたいと一心にお念仏しておりました。幾日目かに昼間夢を見ました。形は人の形に似ているようであるが、色は赤とも黒とも何ともいえぬものを夢に見ました。看病人が起こした時も「もう私はとても助かりそうにないからお念仏してくれ」と言いながらも、その人の形をしたものが見えております。ハッキリと見届けたいと思ってじっと見つめて念仏しました。目が覚めているうちでも、やはり前にそれが居ます。その晩は寝て、翌朝目が覚めても見えています。そこでやはりハッキリ見届けたいと思ってお念仏しました。三日目に兄弟子は死にました。医者が二人とも匙を投げました。今一人の兄弟子が通夜を始め、まず第一に臨終行儀（りんじゅうぎょうぎ）をいたしました。全くお医者様のお診立ての通り死んだのでした。三時間ばかりしてふと気がつくと死んだはずの兄弟子の足がピクピクと動きます。気味悪くなって人を呼んできて枕辺を取巻いて見ているとき、兄弟子は息を吹き返したのでした。ところがそれから三一、二年も長生きをして、亡くなったのは大正二年一月八日であります。

初め死んでいく時の兄弟子の心持ちはどうだったかと後で伺いますと、

傍で南無阿弥陀仏〳〵と念仏を助けてくれるその声もだんだん微かになり、自分の身体はずんずん下へ沈んで行く、実に嫌な気がした。その時もすぐ前に例の人の形に似たものが居りました。やがて上に浮び上る心持ちがしました。その時は気持ちがよかったということです。やがて明るくなってきました。遙か彼方を見ますと桃色の雲が棚引いています。そこに如来様がお現われ下さいました。その如来様を見奉った時「ああこれであった」とハッキリ見届けることのできた安堵を胸に覚えたといいます。如来様がお近づき下さいましたので実にありがたく礼拝し、それが終わると如来様は見えなくなり、やがて周囲が暗く心が重くなりました。がやがやと言う声が聞えます。まさしく息を吹き返したのでした。……

心の中に見奉るところをじっと見つめる位精神統一によい方法はありません。兄弟子も一日目、二日目、三日目もその通り、精神統一によい方法を辿らされたわけであります。そして生きて在ます如来様を見奉った時に、初めてハッキリと見届けることのできた満足を感じたと兄弟子が申しました。夢に如来様が兄弟子にお遇い下さって、三昧心を純熟させて下さったと考えられます。

その後、病中に二度如来様にお目にかかったということです。[5]病癒えて、

安養寺境内の六地蔵尊

(5)「私の信仰が復活するまで」・全集中巻二一頁参照。

その後生麦の安養寺へ住職として行かれました。(6)

大悟徹底

契善師は、その後全快して、生麦の安養寺に住せられたのであるが、当時の安養寺は貧寺であったらしく、雑用一切を自分でされたという。しかし、その多忙の間にあっても、念仏だけはよくつとめられたらしい。その間の師の進境については、上人も御存知なかったのであるが、やがてその進境がめざましいものであったことを、理解されるに至るのである。すなわち、次のように述べておられる。

明治四四年、元祖様七百回遠忌にあたり野外伝道が計画され、伝道者養成のため一週間ばかり講習会が開かれました。(7)私も講師として招待され、その際「真実の自己」についてお話しいたしました。その時の説明は今よりも一層下手でして、回りくどい説明をいたしたわけであります。例の通り私が黒板を叩きながら、「この音はただの音ではありません。音の覚りです」と申しました。繰り返すこと七、八遍目のとき振返って一同を見ますと、どなた様も欠伸(あくび)を嚙みしめております。暑い頃でありましたので、扇

現在の安養寺

(6)「礼拝儀講話」・全集上巻九四―九八頁。

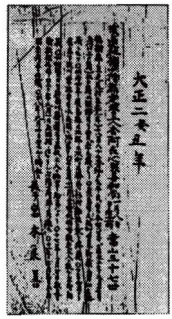
(7)明治四十三年夏のことで、横浜での講習会である。

子の陰で居眠りをしている方もあります。しかるにたった一人私の真ん前で、無学文盲の兄弟子が私の話を聞いてニコニコして喜んでおります。そこで講習会が終わってから安養寺へ行って尋ねてみました。兄弟子は「なるほどその通りだと思ってうれしかった」と申します。「それではお念仏する時何か変わったことがありますか」と尋ねますと、「毎朝念仏する時、初めは本尊様が拝めております。もちろん生きて在ます如来様であります。ありがたくて嬉しくて念仏するが、四百遍位念仏申すとその後は何もかもなくなってしまう。自分の身体も木魚もすべてなくなり、グッスリ寝込んだかと思うとそうじゃない。ハッキリ目が覚めている、無一物である」と申します。(8)

禅宗で申せば実に大悟徹底の心境であります。足の骨も湾曲する程に坐禅をされた大禅師様の心境であります。後に弁栄上人様にこれを申し上げましたところ、「ほんとに大悟徹底だ」とお答え下さいました。「いつ頃からそうですか」と尋ねますと兄弟子は「ここ五、六年来だ」といいました。それは息を吹き返してから二二年目来のことであります。

妙観察智をいただく

(8)「宮本契善師の見仏無生に就いて」・全集中巻五四頁参照。



宮本契善上人の過去帳
（横浜　安養寺蔵）

大正二癸丑年
戒蓮社権少僧都定誉上人香阿在心契善和尚一月八日午后十一時　当山（安養寺）二十七世

大正二癸丑年
橘樹郡生見村生麦（岸）千八百八十二番地戸主宮本契善、嘉永二年十一月十七日生（以上戸籍）但戸籍上誤謬有り実は五十三歳なり○広島市天満町宮本新蔵三男幼名徳蔵と云ふ○明治四年広島県三次町三勝寺杉村勧法に就て得度○十年四月より広島下流川、常林寺吉水荘岡に師事○十三年十一月金戒光明寺観定上人に就き宗戒相承○十四年より神奈川慶運寺良侃上人に師事付弟となり○十七年二月廿日教導職試補拝命○二十年九月一日教師補に任ぜられ、後権少僧都に昇進す○廿一年十一月十

間もなく兄弟子は肺病が募り入院することになりました。「今年の五月迄位の生命であろう。八月を越すことはできない」と医者は申します。それを聞いて兄弟子は一週間ばかり眠らずに念仏しました。翌月退院しましたが、その後約二年生き延び三年目の一月に死にました。病院に入院中も、また退院して後も私はたびたび病床を訪れていろいろのことをお尋ねし、実に尊く感じたことでありました。

退院しておよそ五ヵ月目に妙観察智を頂いたことが分かりました。一粒の米にも、全宇宙を見ると申します。そこで私は、それは華厳三昧の重々無尽のお悟りだと話しましても、無学な兄弟子ですからそんないかめしい言葉は夢にも知りません。私の兄弟子が妙観察智という観音様の御済度の御力をたとえ一部でも頂いていたことについて、つむじ曲りの私はいささか疑いました。無学文盲の兄弟子のことであるから夢で広々とした所でも見てそういうのかも知れぬと思いました。ところが一切を如実に見透しているという証拠を得たわけであります。

それはある時、私が関西旅行に出かけようとしている矢先、母のところから葉書が参りました。母が雨上がりの時、家の前の小橋で滑ってひどく腰を打ったと書いてあります。老体でありますのであまりけががひどけれ

四日六角橋宝秀寺住職○廿八
年九月卅日当山に転住す。
長子　宮本良善

ば伝道に出かけるのを止めねばならぬかと思い、横浜の大倉先生の所へ聞きに参りましたが、先生の申されますには「六十を越した老体だと骨が脆くなっている。ひどく打ちつけたとすると撞木型の骨が折れているかも知れない」とのことでした。当惑しまして兄弟子の許に参り、兄弟子に伺ってみることにしました。先生は斯々申されましたと話しますと兄弟子は、「いいえ骨は折れていない。いかにも痛みがひどいから死ぬかと思ってよくお念仏しているから結局いいではないか」と申します。母は未来主義の念仏しか知りません。それもこの世のことさえ儘ならぬのに、未来のことなど思う通りになるものかといってあまりお念仏しませんでした。兄弟子はそれを見透しておりましたから、「念仏しているから結局いいではないか」と申されました。兄弟子がいうのに「一週間すると痛みが治る。一ヵ月経つとよくなっている」と申します。そこで私も安心して伝道に出かけることに決心しました。負傷後一週間目に母の許からきた手紙を旅行に出る間際に受け取りました。「安心してくれ、痛みは去った」と書いてあります。一ヵ月経って旅行から帰って、母を見舞いに行きますと、回復しておりまして、帰りには私の子供をおんぶして見送りをしてくれました。

かくのごとく一週間後を予言して間違いない、一ヵ月後を予言して間違

現在の久留里遠望（久留里城よりみる）

いない。後に母にその時の心持ちを聞きますと母は、「身動きもできない。このままになってしまうかと思って念仏をしていた」と申します。兄弟子の言った通り間違いない。母親は房総半島の久留里（くるり）という所におりました。東京湾を距てても兄弟子の所とは十何里も離れております。兄弟子が久留里の母親の感じ方、身体の有様、念仏していた事なども知って間違いなかった。一週間、一ヵ月後を予言して間違いない。従って『華厳経』の中のことも駄法螺（だぼら）とはいえないということが信じられました。……

四大智慧をいただく

退院後も私はしばしば兄弟子の病床を訪れまして、いろいろ質問したりまた話を伺ったりしましたが、その時の話の中に、「一粒の米の中にも大宇宙がある」との話もあったわけであります。またある時私は尋ねました。「あなたには全世界が見えていらっしゃると思いますが、私が神奈川にいる時には遠方に小さく見えていますか」と。兄弟子は「眼前に見えていると同様で、大きさ、ハッキリの度合いも少しも違わず見えている」と申しました。私の気持ちから申しますと、生麦と神奈川は二里離れておりますか

ら、見え方が違うかとも思ったわけであります。その当時、宗教大学に受持ちの時間があって学校に通う道すがら、電車に乗って兄弟子の寺の近くを通るたびごとに、達磨大師より三番目の鑑智禅師のいわれた「在と不在となく十方目前」[9]というお言葉を思い出しては、正に兄弟子が同じ心境と拝して大変尊く思われたことでした。

兄弟子が大悟徹底の心境を得られたということは平等性智を頂いたことでありまして、明治十六年に如来様を拝んだことは、如来様の成所作智に合一したことであります。また「一粒の米の中に大宇宙を見る」という言葉は如来様の妙観察智を頂いたことであります。むろん大円鏡智を頂いていたことは申すまでもないことであります。[10]

上人は、契善師の宗教的体験の内容をとおして、念仏三昧がいかに勝れて尊いものであるか、また、われわれとても一心に念仏すれば、必ずこのような妙境に達することができるものであるとの自覚、並びにこの念仏三昧の所見が、実に真実にして真実であるということを理解されたのであった。

契善上人の説教

(9)「信心銘」(大正四十八・377・a)。

(10)兄弟子にある時こんなことがありました。神奈川から東三里、川崎の六郷川が氾濫しました。ある娘さんが溺死をしましたが、どこに流れてしまったことやら分らない。その地方のある住職が私の所に尋ねに来ました。そこで兄弟子の所へ行って聞くことにしました。兄弟子はその当時丈夫ではありませんでしたが、まだ生きていた当時であります。「斯々いう所、そこから細い川が岐れて橋が架っているが、三つ目の橋の下に死骸が掛っている」と教えてくれましたが、果せるかなその通りでありました。

宇宙が自分の心となり、事々物々が自分の心となるのでありますから、その智慧は事実を如実に見る智慧であります。如来様の四大智慧はいい加減なものではありません。真実にして真実、事実にして事実であります。(「礼拝儀講話」・全集上巻九八―一〇二頁)

また、上人は、晩年のお言葉の中で、契善師の説教について、次のように話されたこともある。

私の兄弟子でありました宮本契善師は、無学文盲ではありましたが、実にもう如来様のお恵みを十分に頂いておられました。しかし、あのような無学文盲の兄弟子のことであるから、一体どんな話をしておるのであろうかと、私、不審に思いまして、ある日、そっと兄弟子が説法しておる様子を見にまいりました。そう致しますと、私が想像していたよりも大勢の人が集って、熱心に説法を聞いております。どんな話をしておるのだろうかと思って聞いておりますと、兄弟子が話しております。「如来様は私たち衆生の親様でありますよ。私ども子どもがお念仏を致しますと、親様はもう大変なお喜びでお慈しみ深い心をもって、私ども子供たちをみな一人子のようにお救い下さり、お育て下さって、やがて親様と同じようにして下さるのですよ」というようなことを、くり返しくり返し、だらだらと何時間でも話しております。ところが、このように同じことを、くり返しくり返し話をしておるのでありますから、多分、皆あきあきしてあくびでもしておるのではなかろうかと思って、皆の顔を見まわしてみますと、驚いたことに皆、固唾を呑んで兄弟子の話に聞き惚れておるんですな。それで私、

大変驚きました。如来様のお育てを十分被って御徳を頂いておる人の説法は違うものだ、ということがよくわかりました。そして、その話しております説法の内容と申しますと、お念仏の最も大切なところを、何度も何度もくり返し話しておるのであります。やはり聖人のお説法は違いますでな。[11]

(11)能見寿作氏稿「応病与薬」二七・光明三〇四号。

契善上人の御指示

大正元年の末ごろ、契善師は、病い重く、命旦夕を計られざる有様となられた。当時、上人は、千葉県のある地方に念仏修行に行かれる予定であったが、師が重体のために、もしも万一のことがあっては、途中から引き返さねばならないと思われ、ある日、師を訪ねられたときに、「あなたも程なくお浄土へお帰りになりましょうが、それはいつ頃でありましょうか。実は私は年末に房州に念仏に行く予定ですが、もし年内に御往生でもなされると、私は途中から引き返さなければなりませんので、御往生の御日取をおっしゃっていただきとうございます」と、おたずねになった。師は「私は来年になってから往生するつもりですから、ゆっくり行っていらっしゃい」と言われたので、その年の暮には

安養寺境内の大銀杏

房州へ念仏修行に行き、その翌年一月、再び師をお訪ねになった。

そのときのことか、あるいは前のときのことであるか、不明であるが、上人は師に「もし、あなたが往生なされたら、私は弁栄上人を師と仰ぎたいと思いますが、如何でございましょうか」と、おたずねになった。これまで上人は、弁栄上人を御承知ではあったが、親しく教えを受けられるというようなことはなかった。師は「弁栄上人には先年お目にかかったときも、実に尊い方と思ったが、今頃はさぞ立派におなりであろう。あなたが弁栄上人を師とされることは、それは大変よいことであります」と、お答えになったのである。(12) なお、上人が弁栄上人を師と仰ぎたいと考えられるに至った動機や、いきさつなどは不明であるが、おそらくこれまでに、弁栄上人の評判を聞かれたことはあったであろう。また、その著書(13)を御覧になったり、講演を聴かれたこともあったのではないか、と思う。(14)

さて、契善師は、大正二年一月八日御遷化になり、その後、上人は、師のさきの御指示に従って、弁栄上人の教えを受けられることになるのであるが、ここに戒浄上人の信仰上、第二の黎明期が訪れることとなるのである。

(12)「弁栄上人は究竟の方だ。あなたが弁栄上人を師と仰がれることは、それは結構なことだ」と言葉をつくして讃歎された。初歩の仏眼を得ている兄弟子がそう言われたので云云――と、上人は杉田善孝師に直接おっしゃったことがあった。

(13)例えば「仏教要理問答」など。

(14)「笹本戒浄上人しのびぐさ」六四―六五頁参照。